

氏 名 福本(田熊)友紀子  
 学位(専攻分野) 博士(教育学)  
 学位記番号 論教博第130号  
 学位授与の日付 平成19年5月23日  
 学位授与の要件 学位規則第4条第2項該当  
 学位論文題目 水イメージからみた心理療法

論文調査委員 (主査) 教授 河合俊雄 教授 桑原知子 准教授 田中康裕

### 論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、水イメージを主体として、心理療法過程の展開を捉えようとする試みである。心理療法における水イメージについては、「対象としての水イメージ」に象徴的にアプローチするものが中心であった。それに対して、本論文はイメージの方を主体として捉えることによって、心理療法自体が動いていくダイナミックスとそれを動かす主体としてのイメージとの関連を明らかにしようとする。

第1章「心理療法における「対象」としての「水」イメージ」では、フロイト、ユングを中心とした心理療法における従来の研究が、水イメージをどのように捉えているかがレビューされた。それらが主に「対象」としての「水」イメージの研究であり、なんらかの心理学的事象を象徴的に担っている「水」イメージの様相や変化についての研究であることが指摘された。

「第2章 事例」では、4つの心理療法過程が、「主体としての水」イメージによる展開に焦点を当てて論じられた。1つめは6歳の場面緘黙の女兒(A子)の事例で、緘黙という症状やセラピーでの緊張感や動けなさは、水の「固体」としての特性として捉えられた。心理療法過程では、そのような「固体」が砂状になって流動性を獲得し、さらに水の「液体」としての流動性を強めていったと考えられた。

2つめの事例は、7歳の発達障害の男児(B男)の事例で、最初の描画での「電気がビリビリ」という放電状態は、「主体としてのまとまりのなさ」や「組織化されなさ」を示していて、また水H<sub>2</sub>Oの「気体」の特性に照応していると考えられる。セラピーの経過は、B男の状態が「気体」から「一定の主体としてのまとまり」に「組織化」され、水分子間の結合(凝結)が生じて「液体」化し、水の流動性を獲得するとともに、内的エネルギーの発散(放電)から電力という蓄えられたものへと変化していくプロセスとして捉えられた。

3つめは、青年期の離人感のある女性(Cさん)の事例である。この離人感は夢にも現れてくる「津波」という生命を脅かす水の猛威から隔絶して自身を守っていたことによって生じていたと考えられる。心理療法過程において、外から脅かしていた水は、「手のひらのお茶」として自分の中のものへと反転したと見ることができる。さらに一度終結したCさんが、5年後に治療者のもとに再来した面接過程が4つめの心理療法過程としてとりあげられている。Cさんが「手のひらのお茶」として自分の内に抱え持った「水」に、「もう少し入る」ことを意図して再開された面接で、意外にも今度は「流れ出ていく」という水の動きが生じたと考えられる。

第3章「心理療法過程における「水」イメージの変容」では、第2章でとりあげた事例過程が代表するような、心理療法過程における「水」イメージの変容の特徴が4つのテーマによって明示され、別の事例も取り上げられながら、詳細に検討された。まず、「固体」から「液体」の水への融解過程が、他の心理療法過程も参照しつつ検討された。すると、混沌とした感情の固体化し凍結した状態や、解離的防衛としての「ガラス」イメージという、水の固体状態が融解していく過程が認められる。固体化は混沌の脅威から自我を守るために生じるが、そこから安全な形での融解が生まれることによって液体の

流動性や動きを獲得することが重要であることが示唆された。次に「気体性」という特徴は、ADHDや発達障害といった問題を抱えているクライアントの、まとまりがない瞬間性としての「気体」や、ある種の精神病圏のクライアントの、現実感やこの世とのつながりが切れてしまった状態としての「気体」に認められる。心理療法の過程は、これらの「気体」の状態から、いわば分子間の結合が生じて、重力にしたがった液体となって組織化されたまとまりが形成されるように、自己のまとまりが形成されて他者や現実とのつながりを持つことと理解された。3つめには主にCさんの事例に基づきつつ、未分化な混沌の液体が自我を脅かしている状態から、水へ入っていきながらその水を否定するという、没入と否定の繰り返しによって、混沌の水が精製されて、生命に不可欠の癒しの水へと変容していく過程が考察された。Cさんは、水の内面化を実現させたことで生き生きとした実感を得ることができたが、同時に神経症的な悪循環に入ってしまったと考えられる。それが再来面接の経過の中で、再び水が外に流れ出すという「水の解放」とともに面接を終結した。このように4つめとしては「水の内面化」と「水の解放」という、両者の弁証法的実現が重要であることが指摘された。

第4章「治療関係と「水」」では、「水」イメージの変容や特徴から治療関係のあり方について検討された。第1節「容器から水鏡の形成へ」では、心理療法の容器が形成されて、そこにクライアントの未分化な原初の水が溜められることで、水は知覚可能なものとなり、さらに「水鏡」としてクライアントの真の姿を反映する。第2節「相互浸透」では、クライアントとセラピストの両者の落差・差異があるところで一致させようとするところから、運動が生じ、それが心理療法を展開させていく契機の一つになると考えられる。それは両者の間の渦のようなもので、その動きが融合と分離を生み出している。第3節「忘却の川」では、現在の困難な状態（此岸）からより望ましい状態（彼岸）への「渡渉」にたとえられてきた心理療法の目的に対して、この「渡渉」がレーター（忘却）の川の渡渉として捉えられた。レーターの川の渡渉には「脱衣」と「忘却」が伴うが、心理療法の渡渉とは、「自我のコントロール」を脱いで、「今の治療状況にみずからを委ねる」と考えられた。

第5章「現代の＜意識＞と「水」」では、神話の時代と異なり、水がわれわれを浄化するのではなく、われわれが水を浄化し、管理し、地球規模の水の「循環」に、再び入っていくという意識が現代では必要となっていることが論じられた。また現代の意識性は、自分と他者、主体と客体、内と外が限りなく同質でバラバラな空間となって広がっているところに特徴があると考えられる。心理学的見方においても、クライアントという個人を越えた循環として「水イメージの循環」に入っていくことが基本的な動きであり、これからの心理療法の方向性であると論じられた。

## 論文審査の結果の要旨

心理療法における水イメージについては、水を無意識の象徴とするように、深層心理学のコンテキストで多くの研究がなされており、また神話学や宗教学においても、その象徴性について、関連する研究が多く認められる。しかしながらそれらの研究は、あくまでも水を対象として、その象徴性に関して扱ってきたものであると言えよう。それに対して本論文は、水イメージが主体となって心理療法を動かしていくことを論じたもので、その点にこれまでの研究にない独創的な発想が認められ、高く評価できる。またこのような視点で論じることで、本研究は理論的にはユング心理学の中の元型的心理学に基づいていることになる。つまり元型的心理学は人間中心主義を批判し、ユングの個性化の概念も、イメージによる人間の個性化ではなくて、イメージの個性化を強調していくからである。

本論文における水というのは、非常に広い意味で用いられている。プレイセラピーで使われる実際の水や、夢や箱庭などに表現される水の水イメージだけではなくて、たとえば緘黙の事例におけるように、クライアントが話さない、動かないという固まった状態も凝固し、固体化した水であり、そこから動き出した砂も流動性を持つ水であり、さらには注意欠陥多動障害のような拡散した状態も気体化し、蒸発した水であるとしている。いわば心理療法で生じてくること全てを、水というメタファーで読もうとしているとさえ言えよう。その意味で本論文での水イメージとは、対象であるよりは、状態や状態の変化を捉えていくための視点であると考えられ、だからこそ主体としてのイメージということが言えると思われる。

このように全てを水というメタファーや視点で見えていくと、そこには還元主義の危険が生じてくるかもしれない。事実フロイトの心理学も、性というメタファーで全てを見ていったとも言え、それが性への還元主義として批判されることもある。著者が考察しているように、フロイトのリビドーの概念も、筆者が本論文で述べている水概念と非常に類似しているとも

考えられるので、そのような批判を免れないかもしれない。しかしながら本論文は、水という実体に全てを還元しようというものではなくて、むしろ水を通すことによって、それぞれのイメージや出来事が個別に捉えられることを目指しているものと考えられる。

それを裏づけているのが、水というイメージを通して見えてくる流動性である。たとえば水が固体、液体、気体という状態を変えることを強調していることにも、水に還元して固定化するのではなくて、まさにイメージに動きをもたらすために、水イメージを用いていることがわかるのである。

しかし動きを強調するなかにも、水イメージにこだわっていくなかで、ある種の物質性や実体性が生じてくる。それが概念によっていないことによる特徴であるけれども、それは心理療法という営みにとって必要なしかけであると考えられる。これは、ユングが心理療法の本質を探るために、錬金術によったことと似ている。錬金術においても、抽象化しきれぬわけではなくて、必ずマテリアルがある。それは哲学などからするとグロテスクで、実体化していることになるかもしれない。けれどもそのような物質性こそが臨床のリアリティーにふさわしい。水イメージによる心理療法とは、まさにユングによる錬金術の精神を引き継いだ研究であると言えよう。形や実体にならないものを扱いつつも、それに具体的なイメージやものを見いだしていく点で、本研究は非常に臨床的なものとして、高く評価できよう。

先述のように、水イメージを重ねていくにはやや強引さが目立つとはいへ、第2章における3人のクライアントにおける4つの心理療法過程の提示には、どれも非常に説得力がある。水の固体性、液体性、気体性によって考察していった2つのプレイセラピーの事例も非常に印象的であるけれども、離人感を訴えていた女性の事例は、水イメージに関して、見事な実例となっている。津波や、押し寄せてくる水の水のイメージに対して、堤防などで防ぐ手だてができたり、また逆に多くの神話や物語のように、水に呑み込まれていったりするという心理療法のプロセスは考えられる。しかしながらこのクライアントの解決は、手の中の器に水が入る写真を撮ってもらおうというイメージに象徴的に表れているように、外にあった脅かす水を、自分のうちのものにしてしまうことである。それはまた、神話的なものや共同体的なものを内面化するという近代意識に非常にふさわしいものであったと考えられる。しかも再来した心理療法において、クライアントはもっと内に入ることを望みながら、逆に水が外に流れ出していくのを体験し、自らも心理療法の外へと出て行くのである。このような心理療法における逆説的で、弁証法的な動きを読み取るためにも、自らに動きをはらんだ水イメージにこだわっていくことが必要であったと考えられるのである。

水イメージから心理療法における治療関係を検討した第4章と、現代の意識について考察した第5章は、やや書きすぎているし、思弁的すぎるとも言えなくもない。しかしながらそれらも水イメージを主体として心理療法を行い、またそれを検討していくなかで生じてきた一つの必然ともみなせるのである。

よって、本論文は博士（教育学）の学位論文として価値あるものと認める。

また、平成19年3月8日、論文内容とそれに関連した試問を行った結果、合格と認めた。